

[B年] 降誕前第9主日(2021年10月24日)**【旧約聖書日課】創世記 2章4～9節、15～25節**

4これが天地創造の由来である。

主なる神が地と天を造られたとき、5地上にはまた野の木も、野の草も生えていなかった。主なる神が地上に雨をお送りにならなかったからである。また土を耕す人もいなかった。

6しかし、水が地下から湧き出て、土の面をすべて潤した。7主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。8主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。9主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えいでさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいでさせられた。

15主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようになされた。16主なる神は人に命じて言われた。

「園のすべての木から取って食べなさい。17ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」

18主なる神は言われた。

「人が独りているのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」

19主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。20人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つかることができなかった。

21主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。22そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、23人は言った。

「ついに、これこそ

わたしの骨の骨

わたしの肉の肉。

これをこそ、女(イチャー)と呼ぼう

まさに、男(イシュ)から取られたものだから。」

24こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。

25人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった。

【使徒書日課】ヨハネの黙示録 4章1～11節

1その後、わたしが見ていると、見よ、開かれた門が天にあった。そして、ラツパが響くようにわたしに語りかけるのが聞こえた、あの最初の声があった。「ここへ上って来い。この後必ず起こる

ことをあなたに示そう。12わたしは、たちまち“霊”に満たされた。すると、見よ、天に玉座が設けられていて、その玉座の上に座っている方がおられた。3その方は、碧玉や赤めのうのようであり、玉座の周りにはエメラルドのような虹が輝いていた。4また、玉座の周りに二十四の座があって、それらの座の上には白い衣を着て、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老が座っていた。5玉座からは、稲妻、さまざまな音、雷が起こった。また、玉座の前には、七つのともし火が燃えていた。これは神の七つの霊である。6また、玉座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった。

この玉座の中央とその周りに四つの生き物がいたが、前にも後ろにも一面に目があった。7第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は若い雄牛のようで、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空を飛ぶ鷲のようであった。8この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その周りにも内側にも、一面に目があった。彼らは、昼も夜も絶え間なく言い続けた。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、

全能者である神、主、

かつておられ、今おられ、やがて来られる方。」

9玉座に座っておられ、世々限りなく生きておられる方に、これらの生き物が、栄光と誉れをたたえて感謝をささげると、10二十四人の長老は、玉座に着いておられる方の前にひれ伏して、世々限りなく生きておられる方を礼拝し、自分たちの冠を玉座の前に投げ出して言った。

11「主よ、わたしたちの神よ、

あなたこそ、

栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方。

あなたは万物を造られ、

御心によって万物は存在し、

また創造されたからです。」

【福音書日課】マルコによる福音書 10章2～12節

2ファリサイ派の人々が近寄って、「夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか」と尋ねた。イエスを試そうとしたのである。3イエスは、「モーセはあなたたちに何と命じたか」と問い返された。4彼らは、「モーセは、離縁状を書いて離縁することを許しました」と言った。5イエスは言われた。「あなたたちの心が頑固なので、このような掟をモーセは書いたのだ。6しかし、天地創造の初めから、神は人を男と女とお造りになった。7それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、8二人は一体となる。だから二人はもはや別々ではなく、一体である。9従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」10家に戻ってから、弟子たちがまたこのことについて尋ねた。11イエスは言われた。「妻を離縁して他の女を妻にする者は、妻に対して姦通の罪を犯すことになる。12夫を離縁して他の男を夫にする者も、姦通の罪を犯すことになる。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

創世記 2章4～9節、15～25節

4これが天と地が創造された次第である。

神である主が地と天を造られたとき、⁵地にはまた野の灌木もなく、野の草もまだ生えていなかった。神である主が地上に雨を降らせず、土を耕す人〔別訳→地には働く人〕もいなかったからである。⁶しかし、水が地下から湧き上がり、土の面をすべて潤した。⁷神である主は、土〔ヘブライ語→アダマ〕の塵で人〔ヘブライ語→アダム〕を形づくり、その鼻に命の息を吹き込まれた。人はこうして生きる者となった。⁸神である主は、東の方のエデンに園を設け、形づくった人をそこに置かれた。⁹神である主は、見るからに好ましく、食べるのに良さそうなあらゆる木を地から生えさせ、園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えさせた。

¹⁵神である主は、エデンの園に人を連れて来て、そこに住ませた。そこを耕し、守るためであった。¹⁶神である主は、人に命じられた。「園のどの木からでも取って食べなさい。¹⁷ただ、善悪の知識の木からは、取って食べてはいけない。取って食べると必ず死ぬことになる。」¹⁸また、神である主は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼にふさわしい助け手を造ろう。」¹⁹神である主は、あらゆる野の獣、あらゆる空の鳥を土で形づくり、人のところへ連れて来られた。人がそれぞれをどのように名付けるか見るためであった。人が生き物それぞれに名を付けると、それがすべて生き物の名となった。²⁰人はあらゆる家畜、空の鳥、あらゆる野の獣に名を付けた。しかし、自分にふさわしい助け手は見つけることができなかった。²¹そこで、神である主は人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、そのあばら骨〔別訳→脇腹〕の一つを取り、そこを肉で閉ざされた。²²神である主は、人から取ったあばら骨で女を造り上げ、人のところへ連れて来られた。²³人は言った。

「これこそ、私の骨の骨、肉の肉。」

これを、女〔ヘブライ語→イシャ〕と呼ぼう

これは男〔ヘブライ語→イシュ〕から取られたからである。」

²⁴こういうわけで、男は父母を離れて〔別訳→残して〕妻と結ばれ、二人は一体となる。²⁵人とその妻は二人とも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった。

ヨハネの黙示録 4章1～11節

¹その後、私が見ていると、開かれた扉が天にあった。そして、先にラッパのような声で私に語りかけた、あの最初の声と言った。「ここへ上って来なさい。そうすれば、この後必ず起こることを

あなたに示そう。」²私は、たちまち霊に満たされた。すると、天に玉座があり、そこに座っている方がおられた。³その座っている方は、碧玉や赤めのうのように見え、玉座の周りにはエメラルドのような虹が輝いていた。⁴また、玉座の周りに二十四の座があり、それらの座には白い衣を身にまとい、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老が座っていた。⁵玉座からは、稲妻、轟音、雷鳴が起こった。また、玉座の前には、七つの松明が燃えていた。これは神の七つの霊である。⁶また、玉座の前は、水晶に似たガラスの海のようなものがあつた。この玉座の中央とその周りに四つの生き物がいたが、前にも後ろにも一面に目があつた。⁷第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は若い雄牛のようで、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空を飛ぶ鷲のようであつた。⁸この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その表にも裏にも一面に目があつた。それらは、昼も夜も絶え間なく唱え続けた。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者である神、主。」

かつておられ、今おられ、やがて来られる方。」

⁹これらの生き物が、玉座に座り、世々限りなく生きておられる方に、栄光と誉れと感謝とを献げる度に、¹⁰二十四人の長老は、玉座に座っている方の前にひれ伏し、世々限りなく生きておられる方を礼拝し、その冠を玉座の前に投げ出して言った。

¹¹「私たちの主、また神よ、

あなたこそ

栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方。

あなたは万物を造られ

万物はあなたの御心によって存在し

また造られたからです。」

マルコによる福音書 10章2～12節

²ファリサイ派の人々が近寄って、「夫が妻を離縁することは許されているでしょうか」と尋ねた。イエスを試そうとしたのである。³イエスは、「モーセはあなたがたに何と命じたか」と問い返された。⁴彼らは、「モーセは、離縁状を書いて離縁することを許しました」と言った。⁵イエスは言われた。「あなたがたの心がたくななので、モーセはこのような戒めを書いたのだ。⁶しかし、天地創造の初めから、神は人を男と女にお造りになった。⁷こういうわけで、人は父母を離れて妻と結ばれ、⁸二人は一体となる。だから、もはや二人ではなく、一体である。⁹従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」¹⁰家に戻ってから、弟子たちは再びこのことについて尋ねた。¹¹イエスは言われた。「妻を離縁して他の女と結婚する者は、妻に対して姦淫の罪を犯すことになる。¹²夫を離縁して他の男と結婚する者も、姦淫の罪を犯すことになる。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・10月24日「降誕前第9主日」の日課主題は「創造」。日本基督教団の「新しい教会暦」では、一年一巡りの始まりを「降誕日」の前9主日に遡って設定しており、主日聖書日課も「降誕前第9主日」から新しい一巡りが始まる。「降誕前」という期節名は、「待降節」に代わる呼称として提案されたもので、古い時代のある地域で「降誕日」に備える9週間を設定していたことに由来するが、「新しい教会暦」では、伝統的な「待降節」の4週間を温存したまま5週を付加し、この5週の間「旧約」の主要な主題を記念するものとして提案されている。

・今年の「降誕前第9主日」から新しく始まる主日聖書日課の一巡りは、「B年」と呼ばれる「マルコ福音書」を福音書日課として基軸とする一年。

・この日の旧約聖書日課は、「創世記」から、「天地創造譚」の後半からの抜粋で、おもに「人の創造」についての箇所。使徒書日課は、「ヨハネの黙示録」から、主日礼拝の中で幻を示されたヨハネが天上に引き上げられ、そこで繰り広げられる礼拝を示される箇所。福音書日課は、「マルコ福音書」から、離縁の可否についての見解を問うファリサイ派の人々に対して、主イエスが「創世記」を引用して結婚の神学的位置づけを示された逸話の箇所。

旧約日課(創世記2章より)

・「創世記」は、ヘブライ語正典「律法」の第一巻として置かれ、ユダヤ・キリスト教双方で「正典」聖書の第一巻としての位置を与えられている文書。11章までの「原初史」と12章からの「族長物語」に分けられ、正典「律法」第2巻「出エジプト記」から始まる「出エジプト物語」をさらに古い普遍的伝承に結び付けている。

・日課箇所は、「原初史」の冒頭に置かれている「天地創造譚」の後半部。4節「由来」と訳されているヘブライ語「トーレドート」は、「創世記」中の物語の節目に用いられる鍵語で、「系図」や「物語」の訳語で現れる。4節「これが天地創造の由来(トーレドート)である」は、6:9「これはノアの物語(トーレドート)である」とまったく同じ表現で、「これ」は、前にも後にも掛かりうる。

・この箇所を含めて「創世記」には、いくつもの「言葉遊び」的な語りがある。7節の「土(アダマ הָאָדָמָה)」と「人(アダム הָאָדָם)」、23節の「男(イシュ אִישׁ)」と「女(イシャ אִשָּׁה)」など。前者の例は、同語源による人の起源譚、後者の例は、単語綴りの類似に基づく創造譚。このような譚話は、口頭伝承のみでは成立しないことから、文書伝承化されていく過程で確立したものと考えられる。

・「園の中央」の「命の木と善悪の知識の木」は、3章の「墮罪物語」の伏線として置かれており、一連の物語が注意深く構成されていることがわかる。

使徒書日課(黙示録4章より)

・「ヨハネの黙示録」は、キリスト教正典「新約聖書」の最後に置かれた文書で、「旧約」の「ダニエル書」や一部の「預言書」に見られる「黙示(啓示)文学」形式で著されている。「黙示文学」は、バビロン捕囚後のペルシア支配時代に影響を強めた東方の宇宙観に基づく「黙示思想」によって成立した文学形式。オリエント世界の天文学(占星術)は、「天界」と「地上界」を分けた宇宙観に基づき、「天界」における神的営為(神々の闘争!)が「地上界」に一定の規則に基づいて影響を及ぼすものと考えられていたが、その関係性を示す手掛かりはもっぱら「天体の運行」であった。しかし、「天界」の神的営為を司る神々が意図して「地上界」の人間に「天界」の営為の一部を開示してみせることがあるとされ、それが「啓示(黙示)」と呼ばれた。ユダヤ・キリスト教(またイスラム教)は「啓示宗教」と呼ばれることがあるが、古代イスラエル宗教が元来そのような性格を持っていたというわけではなく、東方からの「啓示(黙示)思想」の影響を強く受けた結果、「啓示」的概念を強く有した性格を帯びるようになったと考えられる。

・日課箇所は、本書著者とされる「僕ヨハネ」が幻のうちに「天上界」に引き上げられて、神の「玉座」を囲んで繰り広げられる礼拝を見せられる箇所。表現方法は「黙示文学」形式に基づいているが、描かれている個々の要素の多くは「旧約」に基づくものと同定されるもので、「旧約」の記述をキリスト信仰に基づいて再解釈してみせていることが分かる。

・日課箇所の全体要素は、「イザヤ書」6章や「エゼキエル書」1章で展開されている「神殿祭儀」の場における幻視に拠っている。また、「出エジプト物語」における「シナイ契約伝承」(出24章)や「幕屋建設伝承」(出25章以下)、「列王記」における「ソロモンの神殿建設伝承」(王上6~8章)などにも、描写要素となったと思われるものが見いだされる。「黙示録」が「四つの生き物」として描くのは、神殿内陣に安置されていた「契約の箱」の上蓋に設置されていた一對の「ケルビム像」と見られるが、「イザヤ書」や「エゼキエル書」で現れる「ケルビム≒セラフィム」の姿形描写とは相違点が多い。実際の神殿では、「契約の箱」上部のみではなく、多くの「ケルビム像」が置かれ、また「ケルビム紋様」の施された掛布が用いられていたとみられ(王上6~8章参照)、また、「黙示録」著者は「ダニエル書」に描かれる「四頭の獣」(ダニ7章)なども参照した可能性も考えられ、典拠箇所の推定は単純ではない。また、初代教会には祭司身分だった者も加わっていたと見られ、彼らの証言が諸教会で共有されていた可能性もあり、著者ヨハネが典拠とした資料は、「旧約聖書」の記述ばかりとは言えない。

・ヨハネ同様の携挙・啓示経験の記述は、パウロにもある(Ⅱコリ12章)。

福音書日課(マルコ 10 章より)

・「マルコによる福音書」は、「マタイ」および「ルカ」と共に「共観福音書」の一つと呼ばれ、「イエス公生涯物語」と「イエス受難物語」を組み合わせた共通の物語構成を枠組みとして編集されている。現代の新約学者の多くは、「マルコ福音書」がまず作成され、「マタイ」と「ルカ」はそれぞれに、「マルコ」を元にし独自の資料も用いながら適宜加筆変更等を加えたものであると考えている。伝統的には、まず「マタイ」が作成され、簡略版としての「マルコ」、独自の資料によって変更を加えた「ルカ」が、それぞれ新たに作成されたと考えられていた。教会で「正典」として用いられてきた「マルコ福音書」(16:8 で終結)には、原典にあったはずの末尾が欠損していると考えられ、それを補う結尾を追加したと思われる写本が多種、伝えられている。

・日課箇所は、主イエスの「離縁・結婚についての教え」として知られる箇所、主イエスの「律法」観やその具体的姿勢が提示されている。

・ファリサイ派の人々が問う「離縁」についての規定は「申命記」24:1 以下に明示されている。この逸話では、彼らによって主イエスの「律法」に関する知識が問われているのではなく、「律法」に対する遵守姿勢が問われている。それに対する主イエスの応答は、「創世記」2 章の記述に基づいて「結婚」の原理原則を示すというものであり、「律法(トーラー)」の具体的な規定(法・掟・戒め)に先行する原則的な神の「教え(トーラー)」を「正典」聖書の中からどのように読み取るかという、一つの例題となっている。ここには、「律法」の諸規定が、実際には「すべき事柄」ではなく「(することが／しなくても)許される事柄」を体系化するものとして用いられていたという現実が浮き彫りにされており、それに対して、主イエスは「神の御心の教え」をより徹底的に遵守する「律法」(聖書)観を提示されている。これは、「マタイ福音書」の「山上の説教」などでも別の形で示されていること。また、「パウロ書簡」でも、パウロがより「神中心主義」を徹底するために取った「律法」(聖書)解釈の立場である。

・この箇所の教えに基づいて、モーセの「律法」で離縁が認められているにもかかわらず、キリスト教会では、原則として離婚を認めない教会法が成立してきた。これは、単に「モーセより主イエスが優先する」という問題ではなく、「文字として記された律法の背後にある神の御心が優先する」という聖書観に基づくこと。

来週の誕生日 (10月24日～30日)**主日礼拝の讚美歌から**

・21-226 番「輝く日を仰ぐとき」(= II 161)は、スウェーデンの伝道者ボーベリが作詞した歌詞をスウェーデン民謡の曲で歌うようになったもの。19 世紀終わりのスウェーデン語讚美歌集で発表された後、

ドイツ語、ロシア語に訳されて歌われるようになっていたものを、英国人宣教師がウクライナで聞いて英訳して紹介した。1950 年代にビリー・グラハムが伝道集会で用いるようになって有名になり、日本には中田羽後が紹介して広く歌われるようになった。

- ・21-351 番「聖なる聖なる」(= □12 番、□66 番)は、19 世紀初頭に英国教会司祭として詩作に活躍した R・ヒーバーが「三位一体主日」のために作詞。曲は、この歌詞のために 19 世紀に教会音楽家として活躍した英国教会司祭 J・B・ダイクが作曲し、「NICAEA (ニケア)」の曲名が付されている。
- ・21-404 番「あまつましみず」(I 217)は、メソジストの救世学校(後の青山学院)で学んだ永井多子子が『譜附基督教聖歌集』(1874 年)の編纂に際して作詞した原詞が改変されて歌い継がれてきた。曲は、当時の米国の福音唱歌曲から。

21-226「輝く日を仰ぐとき」**O Store Gud**

English tr. by Stuart K. Hine

1. O Lord my God, When I in awesome wonder / Consider all
The works Thy Hand hath made, / I see the stars, I hear
the mighty thunder, / Thy pow'r throughout / The universe
displayed;

Refrain:

*Then sings my soul, / My Saviour God, to Thee, / How great
Thou art! How great Thou art!*

2. When through the woods / And forest glades I wander / I
hear the birds Sing sweetly in the trees; / When I look down
/ From lofty mountain grandeur / And hear the brook / And
feel the gentle breeze;

Refrain:

3. But when I think / That God, his Son not sparing, / Sent Him
to die, I scarce can take it in, / That on the cross My burden
gladly bearing / He bled and died To take away my sin;

Refrain:

4. When Christ shall come, / With shouts of acclamation, / And
take me home, / What joy shall fill my heart! / Then I shall
bow In humble adoration / And there proclaim, / "My God,
how great Thou art!"

Refrain:

21-351「聖なる聖なる」**Holy, Holy, Holy, Lord God Almighty**

1. Holy, holy, holy! Lord God Almighty! / Early in the morning
our song shall rise to thee. / Holy, holy, holy! Merciful and
mighty, / God in three persons, blessed Trinity!
2. Holy, holy, holy! All the saints adore thee, / casting down
their golden crowns around the glassy sea; / cherubim and
seraphim falling down before thee, / which wert, and art,
and evermore shalt be.
3. Holy, holy, holy! Though the darkness hide thee, / though
the eye of sinful man thy glory may not see, / only thou art
holy; there is none beside thee, / perfect in power, in love
and purity.
4. Holy, holy, holy! Lord God Almighty! / All thy works shall
praise thy name, in earth and sky and sea. / Holy, holy,
holy! Merciful and mighty, / God in three persons, blessed
Trinity.